サブカルチャーと国語の授業

第３回

早稲田大学
町田　守弘

まちだ　もりひろ
早稲田大学大学院の研究室の開設10周年を記念して，『明日の授業をどう創るか―学習者の「いま，ここ」を見つめる国語教育』（三省堂）を刊行しました。サブカルチャーにも言及しています。

アニメーション教材による授業開発

今回は，国語科のサブカルチャー教材としてアニメーションを取り上げつつ，その具体的な扱い方を考えてみたい。対象とする学習者は，小学校から高等学校までの幅広い校種が設定可能である。アニメーション（以下「アニメ」）は学習者が日ごろから接する機会が多い素材で，十分に彼らの興味・関心を喚起できる。

アニメを用いた授業の具体例として，まず話し合いという活動を取り入れてみたい。アニメをどのようにとらえるかという点について，グループで話し合う活動を中心に授業を構想する。教材とするアニメの条件はとにかく短編であること，そして鑑賞に際して多様な観点が成立することの二点である。

教材の候補として，「岸辺のふたり」と「つみきのいえ」を取り上げてみたい。前者は約８分，後者は約１２分という短編であり，ともに映像とＢＧＭのみで構成されるアニメである。また，その作品世界を鑑賞するためには，多様な観点を考えることができる。

授業は２時間の配当として，まずアニメの全編を紹介する。鑑賞して感じたことや考えたことを踏まえて，このアニメをどのように読み解くことができるかをめぐって，グループ内で話し合う。身近なアニメに関する話し合いということで，活発な意見の交流が期待できる。

続く２時間目には，各グループの代表者が話し合いにおいて出された主な意見を整理して発表する。それをクラス全員で共有したうえで，再度アニメを鑑賞する。個人レベルの学びがグループレベル，そしてクラスレベルの学びへと展開しつつ深化して，再度個人へとフィードバックされるという点に授業の特色がある。同じアニメを２回鑑賞するが，１回目と２回目とでは異なる観点があることを確認したい。

続けてもう一つ，アニメを用いた授業の具体例を紹介する。教材とするのは，宮崎駿監督の「宮崎アニメ」である。分かりやすい内容で，５分程度のまとまりがあるシーンを教材として選ぶ。例えば「魔女の宅急便」で，主人公のキキが箒に乗って空から初めてコリコの町を訪れる場面を鑑賞しながら，映像からことばを引き出してノートにメモを取る。まず単語を列挙することにして，アニメの映像に登場するものと，アニメを見ながら想像したものとに分けてメモする。それぞれのカテゴリーから単語を選んでセンテンスを創作し，それをつなげて文章にする。最終的には詩のような形式で自由に表現する。完成した作品はＢＧＭとともに朗読して紹介する。配当予定は１時間だが，余裕があればグループ学習を取り入れることもできる。

アニメを通して価値あることばの学びを展開すること，それはすべてのサブカルチャー教材に求められる必要条件ということになろう。